歴史と物語が 21 世紀に創出するステージの内と外

藤井光

本発表では、2010 年代の日米の小説において、小説家が歴史をどのように物語にしていくのかを検討した。具体的には、Min Jin Lee の *Pachinko* (2017)、Paul Yoon の“Vladivostok Station” (2017)、宮内悠介『カブールの園』（2017）の三作が、それぞれ歴史の「敗者」である移民を主人公として物語を提示するなかで、どのような「私たち」という共同性を構築しているのかという問題を取り上げ、いずれの小説においても書き手・物語・読み手の関係性が物語内に取り込まれていることを論じた。

「共感」を操作することで、グローバルな読者と在日コリアンの登場人物たちとのつながりを積極的に作り出そうとする Lee においては、書き手は物語中には姿を見せない。その一方で、第二次世界大戦中のサハリンでの強制労働をルーツとしてロシア沿海州で生きるコリアン三世を取り上げた Yoon の短編では、過去と現在の断絶が探求されると同時に、作家の分身的人物が物語内に現れ、書き手と物語の関係性が問い直される。さらにその問題を突き詰めるように、宮内の中編では、「伝承のない」日系アメリカ人の日本語文芸との隔絶と同時に、過去を語ること自体が商品化されたステージが世界の比喩として描かれ、そのなかで物語をめぐる書き手と読み手の共犯関係が問われることになる。

それぞれの書き手は歴史と対峙しつつ、みずからの歴史意識が誰によってどのように受け止められ利用されていくのかという点に極めて自覚的な物語を作り上げている。作家という個が自身を把握する際の参照軸として「歴史」があることは間違いないが、その一方で、これら三つの物語は、歴史を題材として物語が成立する条件として、誰が書き、誰に読まれるのかという問題をそれぞれの方法で意識したものとなっている。